



7編の1節に「シガヨン。ダビデの詩」と書かれています。シガヨンの明確な意味は不明とのことですが、ネットの辞書では、「彷徨う」という動詞から派生した、強い精神的な感情のもとに作られた熱情的な詩とのことです。ハバクク書には複数形・シガヨトが記されています。

端書きに「ベニヤミン人クシュのことについてダビデが主に向かって歌ったもの」とあり、これも理解しにくい文言です。クシュは地名ですが、ダビデとの関係では、反逆した三男アブサロ

ムの死を、将軍ヨアブに命じられて、ダビデのもとに急使として主君、王の敵、あなたに危害をあたえようと逆らって立ったものはことごとく、あの若者のようになりますように(サム下 18:32) と報告に来たのがクシュ人です。それを聞いてダビデは我を忘れて泣きました。

詩人は、神を **避けどころ** とし、そこに逃げ込んでいます。サムエル記にダビデが感謝の歌を捧げた時に、この言葉を用いて (サム下 22:3) いますが、それ以外には詩編にあるだけです。詩人は自分の魂を餌食とする者、追い迫る者から救ってくださいと祈り求めています。自分に落ち度があるならば、死も不名誉も甘受するといいます。そして、神の正しい裁きを激しく求めています。神に逆らう者の不法を思い起こし、悪行が彼ら自身に降りかかるように願います。詩人は心もはらわたも神にさらけ出し、不正な者を厳しく裁き、正直な者を救う、正しい裁きをする神を信頼しています。弱い時、苦しい時、悲しい時、恐れる時、自らをさらけ出して、受け止め、守ってもらえる **避けどころ** (避難所)、それは神への祈りを通して、神の懐に憩うことであると詩人は告白しています。

「讚美歌 21」には詩編 7 の讚美歌はありませんが、ジュネーブ詩編歌には美しい曲があります。

参照 <https://www.youtube.com/watch?v=7JIRqJpPNXk>

8 編は、最初と最後の節で、全く同じ言葉で **主よ、わたしたちの主よ／あなたの御名は、いかに力強く／全地に満ちていることでしょう。(8:2/10)** と、高らかに神を賛美しています。短く整った形です。詩人は天を見上げ、幼子、乳飲み子の気持ちになって神を称えます。幼子、乳飲み子は無垢で従順ながらも、小さな、弱い存在です。そのような者を神は顧み、世界を与えてくださったと、驚嘆しているのです。神はその指をもって、世界を高く、広く、豊かに、完全に創造された。羊、牛、野の獣、鳥、魚など、生かされている命がたくさんある。それらをすべて治めるようにと、幼子、乳飲み子に与えて下さった。**人間は何ものなのでしょう(8:5)** と詩人は問いかけます。詩人はここでは答えを見つけてはいませんが、神の愛、神の作られた世界を、驚きと感謝をもって受け止めている思いが伝わってきます。



「讚美歌21」の116「主よ、わたしたちの主よ」は詩編8の内容を完璧に歌っています。作詞、作曲はドイツのヨハネス・ペツォルド(Johannes Petzold 1912-1985 左)によるものです。詞は最後のフレーズを次の出だしで繰り返すという、循環する形を取っていて、言葉を噛みしめていきます。曲は4分の6拍子ですが、言葉をすらすらと唱える感じで歌うのがいいのではないかと思います。とても落ち着いた静かな和声が伴奏となって響きます。素晴らしい讚美歌です。また、363

「み神の力は」は、神の創造の恵みを賛美するイギリスのアイザック・ワッツの詞にイギリス民謡を合わせて歌ったものです。参照 <http://media.songsandhymns.org/mp3/ISingTheMightyPowerOfGod.mp3>

8 編 1 節に「ギテイトに合わせて」と楽器の名前が出てきます。この楽器は今となっては不明ですが、ペリシテのガト人由来の弦楽器とのことです。